研　　究

育児期にある母親の育児満足感に影響する因子

―子育て不安の認識の有無による違い―

藤井加那子[1)]，永井利三郎[2)]

〔論文要旨〕

本研究では，育児不安の認識と自己効力感，育児満足感との関連を検証し，子育て支援の方向性を見出すことを目的に行った。3歳児健診を受けた母親333名を対象に，9因子からなる質問紙を用いた。

対象者を育児不安の認識で群分けし，［不安なし］群と［現在あり］群で比較した。［現在あり］群の【自己効力感】の得点は有意に低く，【蓄積疲労感】，【役割葛藤】の得点が有意に高かった。また，【育児満足感】に影響を与える因子は［不安なし］群では【自己効力感】と【親子関係】が影響を与える因子であった（R^2=0.442）。［現在あり］群では【人的サポート】が影響を与える因子であった（R^2=0.333）。

この結果，従来のサポートに自己効力感を高めるサポートを併せて提供することが重要であることが明らかとなった。また，不安を抱えている母親に対しては夫や家族を含めた人的サポートネットワークを構築する支援に重点を置くことが有効であると考えられた。

Key words：育児支援，自己効力感，育児満足感

Ⅰ．緒　　言

近年，少子化・核家族化といった社会状況の変化に伴い，母親たちの育児能力の低下が問題視されてきた。さまざまな方面から母親の育児に関する研究が行われ，①子どもの欲求がわからない，②具体的な心配が多く，それが解決されない，③出産以前の子どもとの接触経験が不足している，④夫の育児への参加，協力がない，⑤近所に話し相手がいないなどの要因が育児不安と強く関連していることが明らかとなった[1)]。これを受け，現在では子育てに悩む母親たちが一人で抱え込まないよう，ボランティアや専門職による育児支援が積極的に行われるようになっている。しかし，子ども家庭総合研究所が行った調査[2)]によると，約3割の母親が育児に自信がない，あるいは困難を感じており，「何とも言えない」も含めると，実に6割が育児に対して不安定な心理状況の中で子育てを行っている。インターネットや育児雑誌の普及によって育児情報が氾濫する現代では，母親たちは必要とする情報を得やすい反面その情報に振り回され不安に陥りやすい。また，乳幼児との接触体験に乏しく，見本となる人もいない中で育児を行うため，自分の育児に対しての自信を持つことは難しい。自信が持てない状態では子育てを楽しむ余裕は生まれず，結果として自分の子育てに対する満足感も抱けないと考

The Factor Which Influences the Parenting Satisfaction of the Mother in a Child Rearing：〔1930〕
The Difference Arising from the Existence of Recognition a Parenting Anxiety　受付 07. 4.18
Kanako FUJII, Toshisaburou NAGAI　採用 07.10. 9

1）宮崎大学医学部看護学科小児・母性看護学講座（研究職）
2）大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻統合看護科学分野生命育成看護学講座（研究職/医師）
別刷請求先：藤井加那子　宮崎大学医学部看護学科小児・母性看護学講座
〒889-1692 宮崎県宮崎郡清武町大字木原5200
Tel/Fax：0985-85-9731

Presented by Medical*Online

えられる。母親が育児に対して自信を持つためには，自分に自信を持つことが大切である。Bandura[3]は「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信」を自己効力感と定義し，坂野[4]はこの確信は個人の行動の変容を予測し，不適応な情動反応や行動を変化させると指摘している。つまり，自己効力感はある物事に対して自分が自信を持ってやっていけるという意識であり，この自分に対する自信が物事に対する肯定的な意識，満足感に影響していくと考えられる。子育ての時間を充実した時間と感じられることは，育児を楽しく思えることの大切な因子である。母親たちが自信を持って子育てを行えるように支援していくことで，子育ての中で充実感や満足感を感じられるようになると推察される。しかし，これまでの国内における育児満足感の研究は少なく，父親の子育てへの参加が，母子の関係を良好に保つために役立つ[5~7]ことや，子どもの月齢により育児満足感に影響を与える要因は異なる[8]ことが明らかにされたが，不安や自己効力感との関連，育児満足感を高めるためにはどのような支援が必要なのかは十分検討されていない。

そこで，本研究では母親の子育てへの不安の認知と自己効力感，育児満足感との関連を検証し，今後の子育て支援の方向性を見いだすことを目的とした。

Ⅱ．用語の定義

本研究では，研究で使用する言葉について以下のように定義する。

・育児満足感：母親が自分の子育ての中で感じる満足，あるいは充足感。
・育児効力感：母親の子育てに関する効力感。
・人的サポート：子育てを行っていくうえで母親が助けとなると認知する「人的資源」。

Ⅲ．方　　法

1．対象者および方法

関西地区大都市近郊の2市で2002年8月～9月に3歳児健診を受けた母親333名を対象に，自記式無記名式質問紙調査を行った。調査を実施するにあたり倫理的配慮として，口頭および文書にて研究の趣旨，調査結果を本研究以外には使用しないことを研究者が直接説明し，母親に配布した。質問紙の回収は郵送にて行い，質問紙の返送をもって調査協力の同意が得られたと解釈した。

2．質問紙の構成

調査内容は，一般情報として母親の年齢，就労状況，家族構成，子どもの人数の項目を設けた。「子育て不安をこれまで感じたことがあるか」という質問を設け，「感じたことはない」，「現在感じている」，「以前感じていた」より回答を選ぶようにし，母親自身が子育て不安を認識しているか把握した。

母親の育児満足感に影響する因子として，「自己効力感」，牧野の研究[9]を参考に，子育てや家事・仕事などからくる「疲労」，家庭や仕事の中での役割についての「葛藤」をあげた。仕事や家事と子育ての両立を助ける「夫・家族からのサポート」と「周囲からのサポート」を加えた。さらに，Cleminshaw-Guidubaldi Parent Satisfaction Scale[10]，Parent Sense of Competence Scale[11]より「親子関係」，「育児満足感」，「子育てについての自己効力感」の項目をあげ，【蓄積疲労感】(11項目)，【自己効力感】(13項目)，【親子関係】（8項目)，【育児満足感】（8項目)，【育児効力感】（8項目)，【夫の育児への関わり】（9項目)，【家族との関係】（6項目)，【人的サポート】(11項目)，【役割葛藤】(10項目）の9因子84項目を作成した。回答は4段階リッカート尺度を用い，「そう思う」（1点）から「そう思わない」（4点）とした。また，項目内に反転項目を設け，得点を修正して集計した。

3．分　析

子育て不安の自覚によって群分けし，［不安なし］群，［現在あり］群，［過去にあり］群の3群に分けて分析を進めた。各因子得点の群間差の検定にはMann-Whitney検定，Kruskal-Wallis検定を用いた。さらに群別にSpearmanの相関係数にて因子項目間の関係性を分析し，【育児満足感】を説明変数とし，変数増加法にて重回帰分析を行った。有意確率は5％とした。

Presented by Medical*Online

なお，統計処理にはSPSS Ver.11.5を使用した。

Ⅳ．結　　果

各因子のクロンバックα信頼性係数は【蓄積疲労感】=0.86，【自己効力感】=0.85，【親子関係】=0.73，【育児満足感】=0.65，【育児効力感】=0.74，【夫の育児への関わり】=0.91，【家族との関係】=0.84，【人的サポート】=0.88，【役割葛藤】=0.85であった。

1．対象者の背景

調査用紙は333名に配布，185名より回収された（回収率：55.5%）。このうち無回答などのため集計できなかった分を省いた，176名を分析対象とした。

母親の年齢は33.1歳（SD=4.29）であり，子どもの人数は1.82人（SD=0.69）であった。家族構成は3.96人（SD=0.86）で，82.9%が核家族であった。就業は有職35名（21.5%），無職128名（78.5%）であった。「子育て不安を感じたことはあるか」の問いに対し，「不安を感じたことはない」60名（34.1%），「現在感じている」55名（31.3%），「過去に感じていた」60名（34.1%）であった。就業の有無と子育て不安の自覚に有意差はなかった。

2．因子得点

因子得点の平均値と標準偏差を算出，群毎に比較をした結果を表1に示す。【蓄積疲労感】では［現在あり］群の得点が最も高く，他の群と比べて疲労を感じている姿が浮かび上がった。また，【役割葛藤】でも［現在あり］群の得点は他の群と比べて高かった。【蓄積疲労感】，【自己効力感】，【育児満足感】，【夫の育児への関わり】，【役割葛藤】で3群間に有意差が認められた。

［不安なし］群と［現在あり］群の2群を比較したところ，【蓄積疲労感】（Z＝－3.32，p＜0.001），【役割葛藤】（Z＝－2.84，p＜0.001）で［現在あり］群の得点が有意に高く，不安を感じている母親は疲労を感じ，母親役割を担うことに葛藤していた（表2）。一方，【自己効力感】（Z＝－3.57，p＜0.001），【育児満足感】（Z＝－2.73，p＜0.001），【夫

表1　因子平均得点と標準偏差およびKuraskal Wallis検定　　n＝176

	全体		不安なし		現在あり		過去にあり		χ^2
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
蓄積疲労感	25.39	6.17	23.61	5.79	27.90	6.89	24.77	5.09	11.92***
自己効力感	32.78	6.60	34.65	5.83	30.42	6.77	33.16	6.62	12.20***
親子関係	26.85	3.39	26.69	36.00	26.58	3.49	27.34	3.02	0.32
育児満足感	20.81	2.93	21.84	3.13	20.07	2.40	20.47	2.95	7.72*
育児効力感	20.52	3.98	20.82	3.95	20.73	4.02	20.03	4.02	2.41
夫の育児への関わり	24.95	6.88	26.23	6.80	23.11	6.70	25.40	6.93	5.88
家族との関係	19.33	3.94	19.97	3.65	18.11	4.95	19.75	3.27	3.26
人的サポート	36.95	4.32	37.89	3.35	36.27	4.95	36.58	4.45	5.20
役割葛藤	19.02	4.70	17.65	4.65	20.64	4.58	19.00	4.39	8.30**

* p＜0.05　** p＜0.01　*** p＜0.001

表2　各群毎のMann-Whitny検定によるZ値　　n＝176

	蓄積疲労感	自己効力感	親子関係	育児満足感	育児効力感	夫の育児への関わり	家族との関係	人的サポート	役割葛藤
不安なし 現在あり	−3.32***	−3.57***	−0.11	−2.73***	−0.43	−2.32*	−1.75	−2.00*	−2.84***
不安なし 過去にあり	−1.91	−1.90	−0.47	−2.03*	−1.50	−0.77	−0.655	−1.93	−1.50
現在あり 過去にあり	−2.05*	−1.38	−0.49	−0.17	−1.07	−1.69	−1.19	−0.13	−1.45

* p＜0.05　***p＜0.001

Presented by Medical*Online

の育児への関わり】（Z＝－2.32，p＜0.05），【人的サポート】（Z＝－2.00，p＜0.05）では［不安なし］群の得点が有意に高く，不安のない母親は家族や周囲のサポートを得ながら子育てをしている姿が浮かび上がった。［不安なし］群と［過去にあり］群の比較では，【育児満足感】（Z＝－2.03，p＜0.05）において［不安なし］群が有意に高かった。［現在あり］群と［過去にあり］群の比較では，【蓄積疲労感】（Z＝－2.05，p＜0.05）で有意差が認められ，現在不安を感じている母親は過去に感じていた母親に比べて疲労を感じていた。この結果より，多くの項目で有意差が見られた［不安なし］群と［現在あり］群に焦点をあてて今後の分析を進めていく。

3．因子間の関係

［不安なし］群と［現在あり］群の各群で因子のSpearman相関係数を求め，因子間の関係を検討した（**表3**）。［不安なし］群で【育児満足感】は6因子と関係を示した。このうち【自己効力感】（r＝0.451，p＜0.01），【親子関係】（r＝0.517，p＜0.01）に正の強い相関が認められた。不安を感じていない母親は自己効力感が高く，親子関係を良好と捉えているほど子育てに満足していた。［現在あり］群では【育児満足感】と3因子が相関を示した。【親子関係】（r＝0.358，p＜0.01），【人的サポート】（r＝0.391，p＜0.01）に正の相関が認められた。さらに［不安なし］群では認められなかった【役割葛藤】（r＝－0.311，p＜0.05）と負の相関を示した。不安を感じている母親は，親子関係を良好と捉え，人的サポートを得られているほど子育てに満足し，母親役割への葛藤が強いほど子育てに満足できていない姿が浮かび上がった。

さらに，【育児満足感】に他の因子がどの程度の予想力をもつのか検討するため，【育児満足感】を説明変数とし，変数増加法にて重回帰分析を行った（図1）。その結果，不安の有無によって【育児満足感】に影響を及ぼす因子が異なるということが示された。［不安なし］群

表3　Spearman相関係数

		不安なし群								
		蓄積疲労感	自己効力感	親子関係	育児満足感	育児効力感	夫の育児への関わり	家族との関係	人的サポート	役割葛藤
現在あり群	蓄積疲労感		－.481**		－.375**				－.312*	.522**
	自己効力感	－.477**		.412**	.451**			.398**	.474**	－.368**
	親子関係		.377**		.517**	.514**		.611**	.352**	－.332*
	育児満足感			.358**		.366**		.293*	.317*	
	育児効力感									
	夫の育児への関わり	－.492**						.549**		－.264*
	家族との関係	－.499**	.312*	.391**			.745**		.377**	－.416**
	人的サポート	－.379**	.469**		.391**					
	役割葛藤	.509**			－.311*				－.370**	

*p＜0.05　**p＜0.01

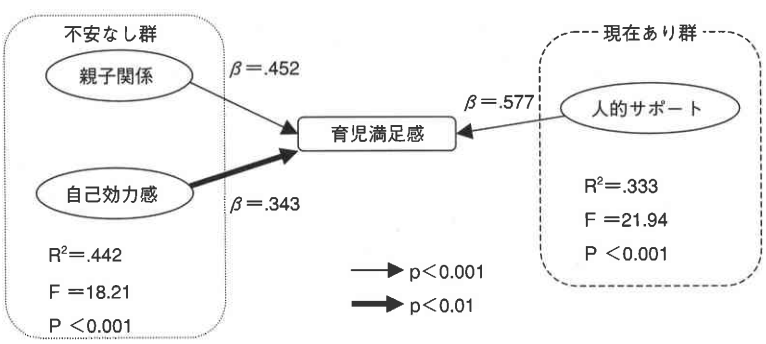

図1　育児満足感に影響を与える因子

Presented by Medical*Online

では【自己効力感】（$\beta=0.343$）と【親子関係】（$\beta=0.452$）が影響力を持つ因子とされ，決定係数は0.442であった。［現在あり］群では【人的サポート】（$\beta=0.577$）が影響力を持つ因子であり，決定係数は0.333であった。その他の因子に影響は認められなかった。

V．考　　察

1．群間の差について

子育て不安による群分けで，各群の因子得点に有意な差が見られた。［現在あり］群は［不安なし］群に比べ，【蓄積疲労感】，【役割葛藤】の得点は高く，【自己効力感】，【育児満足感】，【夫の関わり】得点は低かった。このことから，［現在あり］群は［不安なし］群よりも子育てへの満足感は感じにくく，葛藤や疲労を感じやすい状況であるといえる。先行研究で子育て不安を感じている母親はそうでない母親と比べて抑うつ傾向にあり，疲労を訴える傾向にあるとされている[9]。また，［不安なし］群と［現在あり］群では【人的サポート】にも有意差が見られている。佐々木[12]は子育て不安を感じる人は周囲から孤立している人に多いことを明らかにしている。本研究でも同様の結果が得られ，子育て不安を感じている人は抑うつや周囲からの孤立，夫の協力が得にくい状況におかれていると考えられる。【蓄積疲労感】や【自己効力感】，【育児満足感】など，ほとんどの因子得点が子育て不安の自覚に合わせて変化していた。その一方で，【育児効力感】得点は，どの群でもよく似た結果が得られている。このことから，不安の自覚にかかわらず子育てに対してあまり自信を持てない対象者たちの姿が浮かび上がった。また，どの群でも【人的サポート】は高得点であり，周囲からサポートを受けていると母親は感じていた。これは，子育て不安や子ども虐待といった子育てにおける問題への専門職者や子育てサークルなどの取り組みによって，母親が悩みを抱えたまま，孤立しない環境が整えられつつあることがその一因と考えられる。

2．項目の関係について

［不安なし］群と［現在あり］群の相関にも違いを確認することができた。因子相関の出現はほぼ同じ傾向にあったが，相関の強さが2群で大きく異なっていた。［不安なし］群では［現在あり］群と比べ，【自己効力感】が他の因子と強い相関を示した。効力感が高い人間は支援的な関係を探し，作り出す能力があると言われ，複数の役割を抱えていても肯定的なwell-beingな状態でいられる[13]。不安を感じていない母親たちの自分への自信は，自分の周囲の状況を好意的に認知する助けとなっていると考えられる。

3．育児満足感に影響を与える因子

［不安なし］群では【育児満足感】に【自己効力感】と【親子関係】が影響しているという結果が示された。先の研究で，自己効力感は肯定的な気分で強まり，落胆した気分で低下することが明らかとなっている[14]。また，特性的自己効力感が育児に対する否定的な感情の認知に関連することも報告されている[15]。これらのことから，母親が育児を肯定的に捉えることで，子育てを行ううえで起こってくるさまざまな問題に対し，対応できる力が強められることが推察される。また，自己効力感が強い人間は，ストレスフルな状況に置かれてもストレスを緩和することができるので，子どもの成長などにより新たな環境への適応を求められたとしても，適応への努力を保ち，試練を乗り越えることができるだろう。さらに，大藪は自己評価の高い母親は育児満足感が高くなる傾向を示し，自己評価感情と育児満足感の関係の強さを示唆した[8]。これらのことより，母親が子育てを肯定的に捉えることで自己効力感を強め，育児ストレスなどの問題を乗り越える力を身につける助けとなると考えられる。そして，自己効力感の強まりが肯定的な感情を強め，母親に子育てのなかでの満足感をもたらすのではないかと推察される。

［現在あり］群では【育児満足感】に【人的サポート】が影響しているという結果が示された。金岡たちの研究でも，ソーシャルサポートと育児に対する否定的な感情は，負の関連を示しており[15]，本研究と同様の結果が得られている。また，乳幼児を持つ母親は育児に対する否定的感情の認知と支援ネットワークとしての人

Presented by Medical*Online

的サポートの認知が関連している[16]ことも明らかにされている。不安のある母親たちは不安や困難を解消するために，周囲からの助けを必要としていることが多い。先の研究でも，実際に育児不安を和らげるのに，母親のソーシャルサポートを高めることが役立つと報告されている[17~19]。不安を抱えた状態は精神的に余裕がなく，母親がストレスを感じていると考えられる。誰かから「助けてもらっている」と感じていること，いつでも「助けてもらえる」という安心感があることで，母親は心に余裕を持ち，子育てに対してゆとりを持つことができるようになると思われる。不安を感じている母親にとっては，人的なサポートの充実を図ることが育児の満足感を高めることに繋がると推測される。

以上のことから，自己効力感を高めることで，母親たちが感じている疲労や葛藤も緩和されることが期待できる。疲労や葛藤を強く認識することは，育児満足感に悪い影響をもたらす可能性があることが示され，自己効力感を強めることの意義は大きいと考えられる。そのためには，知識を提供する教育的サポートだけでなく，「自分のやり方で良いのだ」と子育てに対して自信が持てるようなサポートを併せて提供することが重要である。具体的には，育児サークルや育児相談会に少し先輩の母親も参加し，子育て上の不安や悩みについて話し合う場を設けることが挙げられる。今回の調査の中で，「育児を実際にしたことがない保健師さんにいろいろ言われても，真実味がない」や「教科書的な答えしかしてもらえない」など専門職の対応への不満の声が聞かれた。母親たちは経験に基づいた意見や対応方法を求めており，専門職はこのニーズに十分に応えることを要求されている。少し前まで，自分の子どもと同じ年齢の子どもを育てていた母親の言葉は，時代や育児状況などが共通しており，共感が得やすいと推察できる。また，専門職よりも母親との心理的な距離は近く，経験に裏打ちされた先輩からの助言は母親たちの「自分のやり方でも良いのか」という不安を，「このままでも良いのだ」という自信へ変えていくと考えられる。自分と同じような人が努力して成功するのを見ることは，それを観察している人々に，自分もそのようなことができるのだという信念をわき上がらせる[20]。このことから，保健師が主体となって相談に応じるだけでなく，同じ時代に育児をしている先輩母親の話を聞き，自分への自信を強めるように支援することが必要である。

また，［現在あり］群において育児満足感が人的サポートの影響を受けているという結果から，不安を抱えている母親に対しては夫や家族を含めた人的サポートネットワークを構築する支援に重点を置くことが有効であると考えられる。先の研究[21]で，夫や家族からの情緒的なサポートが母親の育児満足感を高めると報告されていることから，ただ単に子育てや家事の分担をするのではなく，母親の苦労を労い，その頑張りに対しての感謝の気持ちを伝えることなど，母親の気持ちを大切にした関わりをネットワークで実践していくことが有効だと考える。

本研究では，不安の解消などの現実的な問題に対する支援だけでなく，自己効力感を伸ばすなどの母親の内面への支援の充実が今後必要とされることが明らかとなった。子育ては時代によって変化し続けるものであり，それを支援する側には変化に対応する柔軟さが求められる。保健師や保育士など育児に携わる専門職は，実際的な不安や問題に対応することはもちろん，母親の持っている力を強める支援を行っていく必要がある。また，情緒的支援だけでなく，母親の必要とする施設・設備の設置を実現するため，行政に対して働きかけていくことも重要であることが示唆された。

Ⅵ．ま　と　め

1．子育て不安を現在感じている母親は，不安を感じていない母親に比べ【自己効力感】，【育児満足感】，【夫の育児への関わり】が有意に低く，【蓄積疲労感】，【役割葛藤】が有意に高かった。【人的サポート】は不安を抱えている母親の方が有意にサポートを受けていると感じていた。

2．子育て不安を感じていない母親は自己効力感が高く，親子関係を良好と捉えているほど子育てに満足していた。子育て不安を現在感じている母親は，親子関係を良好と捉え，人的なサポートを得られている人ほど子育てに

Presented by Medical*Online

満足し，母親役割への葛藤が強いほど子育てに満足を感じていない姿が浮かび上がった。

3．子育て不安を感じていない母親の【育児満足感】は【自己効力感】と【親子関係】の影響を受けていた。子育て不安を現在感じている母親では【育児満足感】は【人的サポート】の影響を受けていた。

この論文は大阪大学大学院医学系研究科に提出された修士論文に修正･加筆を加えたものである。また，本論文の一部は2003年12月に日本看護科学学会学術集会にて発表した。

文　献

1) 服部祥子ほか．乳幼児の心身発達と環境―大阪レポートと精神医学的視点―．名古屋：名古屋大学出版会．1991.
2) 子ども家庭総合研究所．平成12年度幼児健康調査．2000.
3) 江本リナ．自己効力感の概念分析．日本看護科学学会誌　2000；20（2）：39-45.
4) 坂野雄二．一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討．早稲田大学人間科学研究　1989；2：73-82.
5) 乾原　正．親業に関する認知尺度作成の試み―Parenting Locus of Control Scale について―．関西学院大学文学部60周年記念論文集　1994；59-71.
6) 乾原　正，宇　恵弘．親業に関する認知尺度作成の試みⅡ―Parent Satisfaction Scale について―．人文研究　1994；44：30-42.
7) 乾原　正，宇　恵弘．親業に関する認知尺度作成の試みⅢ―確認的因子分析による KGPSS の検討―．臨床教育学研究　1997；23（1）：7-11.
8) 大藪　泰，前田忠彦．乳児をもつ母親の育児満足感の形成要因Ⅰ―4か月児と10か月児の母親の比較―．小児保健研究　1994；53（6）：826-834.
9) 牧野カツ子．乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞．家庭教育研究所紀要　1982；3：34-56.
10) Guidubaldi, J., Cleminshaw, H.K.. The Development of the Cleminshaw-Guidubaldi Parent Satisfaction Scale. Journal of Clinical Child Psychology 1985；14：293-298.
11) Jhonston, C., Mash, E.J.. A Measure of Parenting Satisfaction and Efficacy. Journal of Clinical Child Psychology 1989；18：167-195.
12) 佐々木正美．育児不安の解消は孤独・孤立の解消から．こどもの未来　1996；303.
13) Bandura, A, 本宮　寛，野口京子．激動社会の中の自己効力．東京：金子書房，1997.
14) Kavangh, D.J., Bower, G.H.. Mood and self-efficacy; Impact of joy and sadness on perceived capabilities. Cognitive Therapy and Research 1985；9：507-525.
15) 金岡　緑，藤田大輔．乳幼児を持つ母親の精神的健康度に及ぼすソーシャルサポートの影響．日本公衆衛生雑誌　2002；49（4）：305-312.
16) 金岡　緑，藤田大輔．乳幼児を持つ母親の特性的自己効力感およびソーシャルサポートと育児に対する否定的感情の関連性．厚生の指標 2002；49（6）：28.
17) Tarrka M-T, Peunonen M, Laippala P. Social support provided by public health nurses and the coping of first-time mothers with child care. Public Health Nursing 1999；16（2）：114-119.
18) McVeigh CA. Satisfaction with social support and functional status after childbirth. Maternal Child Nursing Journal　2002；25（2）：25-30.
19) 三橋邦恵，森　恵美，前原澄子．働く母親の適応に関する要因の分析．日本看護科学学会会誌 1999；19（3）：1-10.
20) 牧野カツ子，中西雪夫．乳児をもつ母親の育児不安―父親の生活および意識との関連．家庭教育研究　1985；6：11-24.
21) 丸　光恵，兼松百合子，奈良間美保ほか．乳幼児期の子どもをもつ母親へのソーシャルポートの特徴．小児保健研究　2001；60（6）：787-794.

〔Summary〕

This research aimed to verify the recognition of parenting anxiety and self-efficacy were concerned with parenting satisfaction. As a result, the directivity of future parenting support was found out. The questionnaire which consists of nine factors was handed to 333 mothers who make their child

Presented by Medical*Online

undergo a physical checkup for three-year-olds. The reply was obtained from 176 persons.

The mothers were grouped by whether they have parenting anxiety or not. We compared the "anxiety" group (it means she is anxiety now) with "no anxiety" group (it means she has not been anxiety). [Accumulation of fatigue] points, [Role conflict] points and [human support] points had the significant high score, in "anxiety" group, but [Self-efficacy] points, [Parenting satisfaction] points and [Husband's cooperation] points had the significant low score. The "no anxiety" group had a high feeling of self-efficacy, and it had thought child-parent relationship as it is good, so that it was satisfied with parenting of them. In "anxiety" group, the mothers felt relationship with their children so good and they had so many human supports that they felt parenting satisfaction. Also they didn't have been satisfied with their parenting as they feel conflict with their role. The factor which affects [Parenting satisfaction] was a factor which [Self-efficacy] ($\beta=0.343$) and [Child-parent relationship] ($\beta=0.452$) affect in the "no anxiety" group($R^2=0.442$). In the "anxiety" group, [Human support] ($\beta=0.577$) was the affecting factor for [Parenting satisfaction] ($R^2=0.333$).

Consequently, it became clear that it is important to provide the conventional support with the support which raises self-efficacy collectively. Moreover, it was thought effective to put emphasis on the support which builds the human support network which includes a husband and a family to the mother who is holding parenting anxiety.

〔Key words〕
parenting support, self-efficacy, parenting satisfaction

Presented by Medical*Online